



LETTER FROM COPENHAGEN  
**コペンハーゲン通信 PART VI**  
**1**



**デンマーク王国 DATA**

人口570万人(≒兵庫県)、面積4.3万平方キロ(≒九州)、欧州最古の王室を有する立憲君主国。「世界一幸福度の高い国」「環境・デザイン・福祉先進国」として知られ、アンデルセン童話、食器・家具・知育玩具などのブランドは日本でも有名。

2007年1月より本会事務局職員が在デンマーク日本大使館に出向し、デンマークから現地報告を不定期にお届けしています。本年1月に山口晃平より古澤芽衣にバトンタッチしました。そこで今月号より新たに「コペンハーゲン通信Part VI」として、デンマークからの現地報告を引き続き掲載します。



ヨハネスガーデンの中庭



伝統のオープンサンドイッチのランチ



入居者の部屋



車いすのままでも乗れる  
手作りプランコ



**古澤 芽衣**

在デンマーク日本大使館二等書記官  
 (経済同友会事務局より出向中)

**ストレスフリーな介護施設**

高福祉高負担の国で有名な北欧諸国。デンマークもその一つであり、医療や介護サービスなどは原則無料です(食費などは有料)。デンマークの介護保障制度は、全ての要介護者、要支援者が対象であり、年齢などの制限はありません。こういった介護保障制度は、女性の社会進出などを後押ししていることもあり、国内でも注目度の高い政策の一つです。

先日私は、コペンハーゲン市内にあるヨハネスガーデンという介護施設を見学してきました。ここは国内でも人気の高い介護施設で、常時15人弱がウェイティング状態です。現在、40歳から100歳までの合計74人が入居されており、そのうち約半数が認知症患者です。入居者の介護ケアのレベル・プランはコペンハーゲン市の基準に従って決定され、毎週、入居者に合ったケアプランが作成されます。コペンハーゲン市では、施設で提供する食事の90%をオーガニックにするよう奨励しており、こちらの施設では約80%がオーガニックで、かつ旬な食材を積極的に使うよう努めています。

見学中、私が一番に感じたことは、とにかく「ストレスフリー」ということです。例えば、住居環境について入居者の意思が尊重されていて、寝室とリビングルームが別であったり、簡易キッチンが完備されていたりと部屋の様式が入居者によって異なります。各部屋の大きさは約60㎡でバルコニーが付いており、家具やインテリア、植栽などを自由に楽しむことができます。食事やおやつは基本的に施設が提供しますが、食べる場所も個人の自由ですし、希望すれば入居者の家族と一緒に食事を取ることも可能で

す。施設の食事は、栄養管理は行いますが、極端に塩分や糖分を抑えたりはせず、食べたいものを食べさせるという意識が高いようです。飲酒や喫煙も個人の部屋の中であれば自由です。

また、施設内には、ジム、美容院、簡易医療施設、コミュニティルーム(映画やダンス、合唱を楽しむ場)、中庭などに加え、認知症の入居者向けの特別な部屋もあります。認知症の症状に対する緩和ケアを目的とした部屋で、入居者が若かった頃や子どもの頃の家具や食器、おもちゃなどを集めた部屋になっています。認知症の入居者はこの空間にいると居心地が良いようで、気持ちも落ち着くそうです。入居者はこういった施設内の設備を自由に利用することができます。

ストレスフリーな環境は、入居者だけではなく従業員に対しても感じました。現在80人の職員が在籍していて、そのうち約60人がフルタイムで、それ以外は、週の労働時間を20時間から30時間の間で選択できる制度になっています。シフト制ではなく、勤務する時間帯は基本的にフィックスなので生活バランスを安定させられます。施設内にあるジムの利用も自由で、施設の行事も一緒に楽しんでいました。また、施設中庭には職員手作りのリハビリ用エリアや家庭菜園などもあり、入居者のために何か作ってあげたいという気持ちが溢れていると感じました。

こういったストレスフリーな環境が作り出せるのは、しっかりとシステムが国レベル、地方レベル、施設レベルで確立されているからなのだと思います。従業員の労働環境をしっかり作ることで、入居者もその家族も安心して楽しい最期を迎えられるのだと実感しました。